

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 中西麻澄

論文提出者の博士学位請求論文（甲）の審査結果は、以下の通りである。

論文タイトルは、「古代ローマ社会における馬—モニュメント、美術作品から読み解く、ローマ人の馬へのまなざし—」で、審査は、平成 24 年 5 月 12 日（土）、10～12 時に 18 号館コラボレーションルーム 4 で開催された。審査委員は、専攻から、池上俊一、高橋英海、筒井賢治の 3 名、ほかに本村凌二（元本学教授）、篠塚千恵子（武蔵野美術大学教授）、中村るい（東京藝術大学非常勤講師）の計 6 名で、池上が主査を務めた。

まず提出論文の内容を簡単に紹介してから、評価を述べたい。

本論文は、これまでの古代ローマの馬についての研究の欠落を埋めるために、モニュメントや美術作品を基礎史料とし、そこから古代ローマ社会における馬と人の関係を読み解くことを目的としている。本論は大きく二部構成をとっている。まずカタログ編では、約 1000 頭の馬の図像を収集し、各図像を考察・分類し、カタログ化している。そしてこれを基礎史料として、論文編での考察を行なっている。

まず第 1 章「コイン」では、共和政期の前 268 年から帝政期の後 238 年までの約 500 年間にわたる、古代ローマの馬図像総覧を作成することから始めている。コインは画面は極めて狭いものの、発行年代が明確で数量的に豊富なため、時期ごとの重要作例が明確だという利点がある。筆者は大英博物館のコレクションより馬の図像を 2785 点発見し、そのうち典型的なもの 234 点を図版入りでカタログ化した。これをもとに論文では、まず頻出図像（ディオスクリ、騎士と騎馬像、戦車）について考察し、次に「火葬台上の戦車」図像等から、人と馬の関係について考察している。

第 2 章「記念柱」では、《トラヤヌス帝記念柱》（113 年）と《マルクス帝記念柱》（193 年以降）浮彫が対象になっている。戦争絵巻物の観を呈するナラティブなそれらの浮彫には、単なる戦闘場面だけではなく、日常生活図もあり、当時の馬の使用の仕方や、馬と人の親密な様子が見られる。馬一頭ずつを「ナンバリング」し、その過程で一頭ごとに、ローマ軍馬と敵の馬、同盟軍の馬、戦利品の馬、ラバを見分けながら、観察、記録していき、その結果、「落馬」、「ドナウを渡る」の二場面の新解釈が提示されている。また馬の 4 つの歩様（停止、並足、駆足、襲歩）がパターン化された表現であったことや、両柱の様式的相違も明らかにされている。

第 3 章「凱旋門」では、ローマに現存する、浮彫画のある 3 つの門について考察されている。それらのうち最も初期の《ティトゥス帝凱旋門》（81 年以降）にある「凱旋行進」浮彫では、ティトゥスと馬たちと凱旋戦車、それぞれの向きが一致しない表現がなされているが、これについて筆者は、この凱旋門浮彫の凱旋行進と、未来にこの凱旋門をくぐる行進との「二重の凱旋行進」がイメージされていた可能性を提示している。203 年建立の《セウェルス帝凱旋門》の浮彫モチーフが非常に細かく小さい理由については、門上の主役の凱旋戦車彫像（現存せず）を目立たせる目的だとの仮説が示されている。4 世紀初頭の《コンスタンティヌス帝凱旋門》には、皇帝自身の浮彫のみならず、別の皇帝のモニュ

メントから移された大浮彫板がはめ込まれているが、それらの分析から、記念柱浮彫とは相反する様式の問題が浮かび上がってきた。

第4章「騎馬彫像」では、主に当時の唯一の現存作例ともいえる《マルクス・アウレリウス帝騎馬像》(161~180年)が考察されている。当時の騎馬像の歴史や馬・馬具の検討、文字史料との突き合わせなどを経て、《マルクス帝騎馬像》を騎乗術や解剖学的整合性から考察した結果、これは写実的ではなく、そこには、頸の位置と歩く後肢が矛盾する、ローマの騎馬像独自の「ローマ型歩行後肢」の形が見出されることが明らかにされた。そしてこの形が古代ローマで作られ定着した背景として、当時の社会における騎馬行進の重要性、およびキルクス競走が生活に浸透していた事実との関連が指摘されている。

第5章「皇帝親衛騎馬部隊騎士の墓碑」(主に2~3世紀)では、通常のカテゴリ基準を離れ、墓碑表面を広く占める「浮彫画」を基準に新たに図像分類し、その後、浮彫図像と銘文を対照させる方法が用いられている。その結果、騎士の階級により、その墓碑に付される浮彫画が決まっているものがある事が分かり、馬との距離にもそれぞれ違いがあることが明らかになった。

第6章「モザイク」は、風景、狩猟、キルクス、肖像の4つに図像分類されている。中でも「馬の肖像モザイク」は非常に特異で、かつローマ人気質を最もよく表すものであることが明らかとなった。というのは、これは古代ローマの馬図像の大原則を破り、馬に人物像が伴っていないからで、この特別な「馬の肖像」の存在の背景には、「勝つことを愛する」ローマ人気質を見出すことができると考えられている。

以上6章に渡る考察の結果、明らかになったのは、1)ローマの騎馬像では、強く屈撓した頸と歩く後肢が矛盾する馬の形態がしばしば見られるが、これは表現の未熟さ故ではなく、実際に馬に乗った時の騎乗感覚が表現させたものだとして解釈できる。2)古代ローマの馬の美術表現での非常に大きな特徴は、一画面内に、馬一頭だけをシンボリックにあらわさず、常に人間像に伴うものとして馬像を表現した点だが、これは、古代ローマ人独特の、動物や怪物に対する「人間優位」のメンタリティーによるものである。3)しかし唯一の例外が、小画面の《競走馬の肖像画》モザイクであるが、この特例は、戦争が頻繁にあった古代ローマ人ならではの「勝利」に対する絶大な価値観から生まれたと考えられる。4)勝者ローマを形象化したプラス・イメージと敗者のマイナス・イメージ両方が見出された。これらのマイナス・イメージは、プラス・イメージを引き立てる目的以上に、古代ローマ人の現実主義が原動力となり、描かせたものだとして強く推測される。

*

以上が、本論文の概要である。馬についての図像を1000点集め、綿密に観察・分類・記述した研究はこれまで存在せず、じつにスケール壮大で、審査員一同、驚きを覚えながら本論文を読んだ。とくに、ナンバリングという手法が、大きな効果を発揮した仕事だと、高く評価することができる。つまり馬の種類を見分け、それが敵か味方か同盟軍か、あるいは馬かラバか・・・などを区別したのは画期的だし、カタログにすべて **description** を付けたことも好感が持てる。また約400頭の「馬の名前」リストも有用である。この「カタログ」作成のみでも大変な仕事で、これは世界に問うことのできる仕事であろう。

論文本体のほうも、その論旨は大筋では納得できるものである。美術史のみならず、地域史・社会史的な観点も採り入れて、その意味でも豊かな肉付けがなされている。全6章のなかでも「記念柱」についての章は、とくに優れている。この「記念柱」は、美術史学界でも有名な作品であるが、これを馬に焦点を当て、「馬の身振り言語」を徹底的に解明してから作品全体を解釈し直すことにより、今までとはまったく違う図像の意味が見えてきたのである。それは、何より、本論文の刮目すべき方法である、自身の馬との付き合いおよび乗馬体験を原動力として新知見を導きだす・・・という方法の勝利だと思われる。馬に本当にこのような格好はできるのか、馬の個々の身振りは馬のどんな気持ちに対応しているのか、こうした馬についての深い理解から、はじめて正確な作品解釈ができることが説得力をもって示された。たとえば筆者は、マルクス・アウレリウスの騎馬像の形が、本当にできる否かを、自分で実際に馬に乗ってやってみた上で仮説を示している。この「馬の身振り言語」解明により、本論文においては、通説の多くが覆されたが、これまで「ダキア族の敗北の予徴」と解釈されていた「落馬」シーンは、じつは「ローマ兵にとっての皇帝の寛容さ」を主張するプロパガンダとしての図像だということが分かったことは、とくに意義深い。

ただし、カタログの画期的意義、および論文の中の数多くの独創的解釈に大いに感心しながらも、本論文には欠点がないわけではないことが、複数の審査員より指摘された。

まず、「馬を愛する人」としての筆者の動機が前面に出ているが、これは最大の長所・武器であるとともに、ともすると主観的な思い込みに陥りやすいという危うさを孕んでいる。とりわけ結論部分の、「古代ローマ人の馬へのまなざし」のところで、ローマには人間像のない馬だけの画面を原則として作らない「人間優位のたてまえ」があるとしたり、さらに馬を一頭だけシンボルのように表して崇める感覚はローマ人にはなかった、としているが、それらの結論はあまりに性急かつ素朴で、ギリシャやカルタゴなど、ローマ以外の馬とも比較しないとまらないのではないかと思われる。またこれとも関連するが、「ローマ人」一般が主語になって議論が進められ、時代による差、身分や立場の違い、あるいは地域による差はないのか、疑問が残る。

それから6章に分けて馬図像の媒体ごとに論じているが、それら媒体の間の質の問題が十分に考慮されておらず、すべてが平均化された上で網羅的に扱われている。そうした扱い方によって見えてくるものももちろんあるが、逆に見えなくなることもあるのではないだろうか。第一級作品の墓碑と、コインなど二次的芸術とには差異があり、アプローチの仕方も変えるべきではないかと思われる。

さらに図像を補うものとして文字史料も使っているが、たとえばスエトニウス、ディオ、カッシウス、ウェルギリウスなどを使いながら、なぜウァッロを使わないのか、選択規準が不明だし、また New Pauly など百科事典的な参考文献に依拠している記述部分も多くあり、専門研究をもっと参照したほうがよかった。

最後に、地名の同定の誤りや、誤字も散見される。

以上、いささかの欠点なしとはしないが、本論文のスケールの大きさとオリジナリティーの高さは、それを補って余りあるものである。したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。